

# 津市総合計画前期基本計画の中間見直しに対する意見書

## ●地域かがやきプログラムの中間見直しについて

### 1 見直しの視点

津市総合計画では、従来の道路、鉄道等の陸路に加え、中部国際空港への海上アクセスによって交流人口を増大し、将来的な津市の発展を展望している。

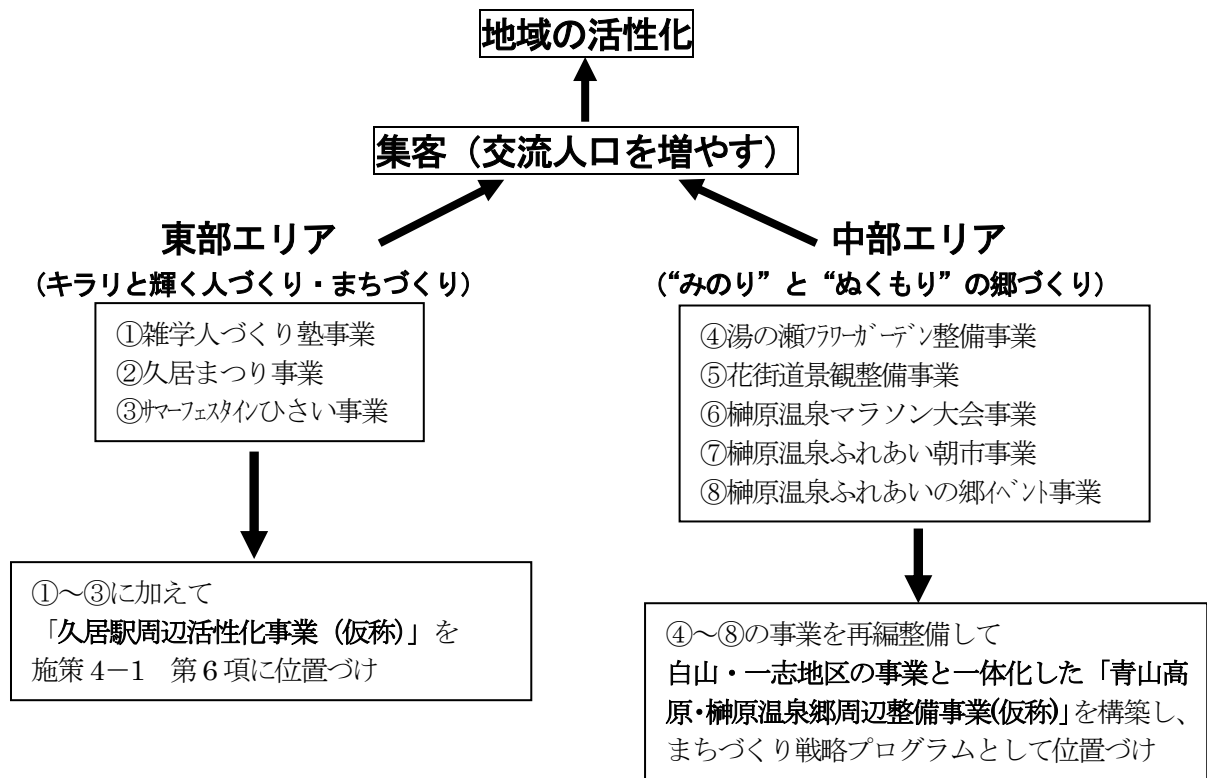
計画のベースである土地利用方針では、市域を「都市ゾーン」、「農住ゾーン」、「自然環境共生ゾーン」の3つに区分し、「都市ゾーン」では都市機能の集積、「農住ゾーン」では農林業の振興、「自然環境共生ゾーン」では豊かな自然環境や森林資源を保全、活用し、農林業の振興や観光を推進することとしている。

その中で、久居地域には、「都市ゾーン」と「農住ゾーン」が共生しており、前者が東部エリア、後者が中部エリアとなっている。特に、久居駅周辺地区は市南部の玄関口として副都市核に位置づけ、交流拠点として副次的な都市機能の整備を進めることとしている。また、中部エリアは、本市の中でも、特に豊かな自然環境に恵まれた地域で、観光・レクリエーション、自然環境保全への取組が期待されている。

このような視点から、久居地域における地域かがやきプログラムを捉え、(1)地域かがやきプログラムの目的は何か、(2)総合計画では「特色ある地域振興」を目的としているが、事業そのものが目的化していないか、(3)各事業実施上の問題点は何か、(4)解決策は提示されているか、(5)問題点と解決策は適切であるかを検証する。

なお、個別事業の検証結果は「5」で後述する。

### 2 現状及び新規事業の提案



## ●新規事業の提案

東部エリアでは、①から③の事業に加え、現在進行中の久居駅東側周辺地区整備事業に絡めて駅前の利便性を活かし、賑わい性を高めるための都市機能の整備・充実を図り、副都市核に相応しく整備する必要がある。

中心市街地では空き店舗の増加で商店街の連続性が失われ、衰退傾向が著しいため、郊外型の大型店との明確な差別化、徒歩でブラブラ歩きまわることができ、疲れたら、ほっとくつろげる店がある「歩いて暮らせるコンパクトな街づくり」のための魅力ある商店街づくりに向けた環境整備が必要である。そのため、車の通行を気にせずにする、来街者の安全面に配慮した環境整備に対する支援のほか、チャレンジショップなどの空き店舗活用や文化活動とのタイアップ(屋外ライブやアート展)など、若い世代の発想も積極的に取り入れ、新しい商業の可能性も検討してはどうか。

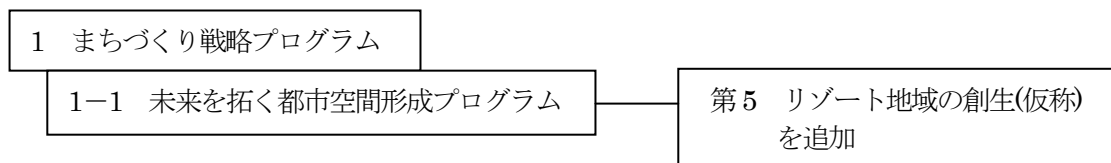
また、副都市核として位置付けられた久居駅周辺地区を包含する新たな「久居駅周辺活性化事業(仮称)」の構築が必要である(施策体系図 4-1 第6項に位置付け)。

施策体系図



中部エリアでは、④から⑧までの個別事業を再編整備して白山、一志地区の事業と一体化した「青山高原・榊原温泉郷周辺整備事業(仮称)」を構築し、まちづくり戦略プログラムの1-1 未来を拓く都市空間形成プログラムの5番目に「リゾート地域の創生(仮称)」を追加し、ここに位置付けた事業とする。

重点プログラムの体系図



## 「青山高原・榊原温泉郷周辺整備事業(仮称)」の具体的イメージ

### 背景

- (1) 近年、東南アジア等近隣諸国からの飛躍的増加が予想されている観光客をどれだけ誘致するか、観光レクリエーション事業の推進は、観光立国を掲げる国・地方自治体の重要課題である。
- (2) 総合計画でも「津なぎさまち」を玄関口として津インターチェンジ間を新都心軸とし、国内外の入込客を温かく受け入れるよう整備する方針であり、本市における最重要施策の一つとしている。

- (3) 本市で観光事業を大々的に推進すべきエリアは中部エリアであり、その中核を成すのが青山高原・風力発電・榊原温泉周辺地域である。
- (4) 久居地域では、合併以前から久居駅周辺地区、久居インターチェンジ周辺地区とともに青山高原・榊原温泉周辺地区を3つの核となる交流拠点として位置付けてきた。
- (5) 榊原温泉は、全国的に広く知られた名泉であるとともに、その周辺には自然豊かな里山や雄大な風景が広がる青山高原が控え、さまざまな観光資源に恵まれている。

## **主なポイント**

- (1) 榊原地域で行う事業を白山、一志地域の事業と一体化して「**青山高原・榊原温泉郷周辺整備事業(仮称)**」とし、**まちづくり戦略プログラム**に位置付ける。
- (2) 地域間調整により既存事業の再編、再構築を行う。
- (3) 次の事業を取り込み、地域振興を図ることをベースにこれらの事業に取り組む。
  - ① アクセス道路の早期整備(県道青山高原公園線、県道亀山白山線等)
  - ② 農畜産物の産地化・特産品化事業
  - ③ 農業法人、企業等による6次産業(農商工連携)の育成など農業の振興
  - ④ 耕作放棄地、里山、森林など農林業資源の保全事業、獣害対策と食肉活用
  - ⑤ 自然環境を活かした体験学習、健康学習の推進
  - ⑥ グリーンツーリズムに対応した環境整備
  - ⑦ 地元の歴史、文化、イベントを利用した情報発信事業

※ 新規事業の開始年度は、後期基本計画開始年度の平成25年度とし、それに向けて関係者の議論を始める必要がある。

## **3 地域かがやきプログラムの事業実施において留意すべき点**

- (1) 事業そのものを目的化せず、事業の目的を多面的に捉えて事業の推進を図る。(事業の背景・目的・目標・目標要件を整理してから、課題・検討項目を明確にし、課題系統図で、ヒト・モノ・カネ別に課題を洗い出して事業に取り組む)
- (2) 目標設定及び成果の活用方法を明確にする。
- (3) 成果指標は、可能な限りアウトカム指標とし、評価基準を見直す。
- (4) 原則として、必要のない事業を無駄に存続させないようにサンセット方式を採用する。
- (5) 全般的にイベントに偏り過ぎているため、地域かがやきプログラムの在り方について再考が必要。
- (6) 合併の最大課題である「地域間交流」を促進するため、旧市町村域やエリアに捉われないプログラムを取り入れる。

## **4 今後の地域かがやきプログラムに対する提案**

- (1) 行政主導でなく地域住民主導により、市民一人ひとりが生涯を通して、健康で生きがいを持って安全で安心して過ごせる地域社会を実現するための課題を選択する。(子育て、介護、独居など崩壊した家庭機能の支援対策、高齢者の生きがい、雇用対策から農林資源など自然環境保全対策等、身の周りの全ての行政課題を対象とする)

- (2) 課題解決には多数の地域住民の連携・参画が必要であり、特に定年退職した世代が持っている経験・知識・技術は多様で得がたいものであるため、これらの世代の人たちが地域活動に参加してもらえよう働きかける。
- (3) 課題解決の参画者は、地域の課題解決に自主的、積極的に参加、協力する意欲のある多様な地域住民等(個人、ボランティア、任意団体、NPO及び企業)とする。
- (4) プログラム選定に当たっては、エリア間調整に留意する。
- (5) 公募委員で構成するプログラム選定委員会を設立する。(提案:委員数は数名以内とし、無報酬、交通費程度の支給とする)

## 5 現在の地域かがやきプログラム事業に対する意見・提案など

### (1) 地域を担う人づくり 多様な人材の育成 (津市民大学 雑学人づくり塾事業)

- ・現在は、事業内容が7地区公民館でバラツキがあり、どのような人づくりを目指すのかが明確でないように思われる。地区公民館により特色があっても良いが、まずは目標を明確にし、講座内容の絞り込みが必要である。
- ・受講生が活躍できる仕組みづくり(ゲストティーチャーへの活用や受講生からの講師登用など)を早急に整理すべき。
- ・地域には、これまでの経験(仕事や趣味など)を生かして講師となれる人材が眠っていると思われるため、このような人材の発掘・登用も必要と思われる。また、後継者が不足している自治会長や民生・児童委員など、地域のリーダーとなる人材の発掘や育成にも取り組んで欲しい。
- ・支所や出張所の統廃合が進む中、地区公民館には、地域のコミュニティセンター的な役割が期待されている。公民館講座生だけでなく、地域住民にも開かれた施設として活用できるよう努めて欲しい。

### (2) 地域を担う人づくり スポーツ・レクリエーション等を通じた生きがいづくり

#### (久居まつり事業、サマーフェスティバルひさい事業)

- ・久居駅周辺地区は、総合計画で副都市核として交流拠点の一つに位置づけられている。この位置づけに相応しい新たな交流と活力を創造するためにも、久居駅周辺が一体となって取り組む必要がある。
- ・現在の久居まつりは、二ノ町会場に限定した祭りとなっているため、久居駅一帯で祭りの雰囲気を出すことで、久居駅からも来場者が誘導できるよう工夫が必要である。(ポスターやのぼりの掲示など)また、会場が狭く、高齢者や子どもたちには危険なため、隣接する新町や本町への会場拡大も検討して欲しい。
- ・よさこいなど、他所の地域にある催しよりは、久居地域の伝統ある踊りや文化活動を発掘して取り入れ、地域独自の祭りを工夫して欲しい。

### (3) 温泉リフレッシュゾーンの魅力アップ 温泉利用客誘致への魅力アップ

#### 活力ある温泉ゾーン形成事業(湯の瀬フラワーガーデン整備事業、花街道景観整備事業)

- ・榊原温泉・青山高原は、総合計画でレクリエーション拠点の一つとして位置づけられており、津市観光ビジョンでも重点地区の一つとして取り上げられている。この位置

づけに相応しい拠点づくりに向けて、榊原地域で行うさまざまな事業(榊原温泉マラソン大会、ふれあい朝市、秋の収穫祭など)を一体的に考え、盛り上げていく必要がある。

- ・地域住民、温泉旅館、市の三者で、榊原温泉郷を今後どのように発展させていくべきかを話し合い、まずはランドデザインづくりから始める必要がある。
- ・花街道景観整備事業は、植栽品種を工夫することで、年間を通して花が楽しめるよう工夫するとともに、車を止めて鑑賞できるよう工夫してはどうか。また、榊原温泉郷内の景観整備にも取り組んで欲しい。

#### **(4)温泉リフレッシュゾーンの魅力アップ 温泉でつなぐふれあいルートの設定**

##### **(榊原温泉マラソン大会事業)**

- ・当事業は、大会名称に「榊原温泉」を使うことで、榊原温泉のPRに寄与している。平成21年度から開催時期を11月に変更したため参加者が減少しているが、今後、早い時期に開催日時をPRし、沿道での応援協力や参加者の増加を目指す必要がある。
- ・マラソンによって榊原温泉を訪れる参加者等を、宿泊客に繋げるための工夫が必要である。(温泉施設等と連携し、大会前日にスポーツ関連の講演会やウォーキング大会を開催するなど)

#### **(5)食のブランド化 地産地消の促進 (榊原温泉ふれあい朝市事業)**

- ・より魅力的な朝市へ発展していくためにも、生産者組織を充実し、農作物や加工品の品数を増やし、開催数を増やして定期的に行うことができるよう目指す必要がある。
- ・榊原の朝市としてオリジナルの名物や特産品の掘り起こしを工夫し、朝市を通じた榊原温泉の魅力アップを目指して欲しい。
- ・将来的には、市からの支援を受けずに自立していけるよう指導が必要である。

#### **(6)食のブランド化 特産品づくりの推進 (榊原温泉ふれあいの郷イベント事業)**

- ・現在は、イベント(「榊原温泉 秋の収穫祭」)に対する支援を行っているが、当プログラムの目標である「特産品づくり」の実現に向け、榊原温泉の特産物を生かした商品開発や名物づくりにも取り組む必要がある。
- ・古代米を活用した特産品づくりは、民間企業等の協力によるお菓子の商品化で一定の成果を得ているが、今後、販路開拓のため、県や県観光連盟、市観光協会等にも広報で取り上げてもらえるよう売り込みが必要であり、さらに、古代米に続く新しい名物づくりにも取り組む必要がある。